

2019年2月5日(火)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 松平莉奈さんWS 黄表紙を作って読んでみる —『金々先生栄花夢』との再会—

1,4回目のご来館

2月5日は、今年度のWSの最終回でした。

松平さんはこれまでのWSを通じて、「絵と文字が融合した表現」に惹かれたようです。これまでの創作活動でも、紐をモチーフに使うことが多かったという松平さん。絵と文字が同じ画面に存在しており、くずし字が時に絵のように見える表現に関心を抱いた、ということをお教えいただきました¹。

そこで、特に絵と文字が緊密な関係にある草双紙くさじょうし(江戸時代に出版された絵入読み物)に注目してみてはどうかと考え、この日は、『金々先生栄花夢』²(安永4年(1775)刊、恋川春町作・画)という作品をじっくり扱ってみることにいたしました。『金々先生栄花夢』は、草双紙のなかでも「黄表紙」という大人向けのジャンルの元祖とされている有名な作品です。

¹ 松平さんが、現在のご関心について語ってくださったインタビューは、ないじえる芸術共創ラボのHPからご覧いただけます。→「松平莉奈さんへ5つの質問」

<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist/index.html>

² 画像は、江戸へ出てきた金兵衛が目黒不動の栗餅屋でうたた寝を

【あらすじ】³

謡曲「邯鄲」^{かんたん}を翻案したもの。田舎から出てきた金村屋金兵衛が、金持ちの養子になって「金々先生」と呼ばれながら放蕩三昧にふけり、養家から勘当される夢を見て、栄華のむなしさに気づき国へ帰る話。



実は松平さんは、以前ご自身の作品⁴のモチーフに『金々先生栄花夢』を選ばれたことがあり、改めて本作と向き合うこととなります。

するところ。国文学研究資料館蔵

(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200015145/viewer>)。

³ 『日本国語大辞典』参照。

⁴ 「菌々先生」(2017年発表)

2019年2月5日（火）

2, 実験国文学⑦—『金々先生栄花夢』をつくってみる—

初回から「実物を観察する」ことを大切にしてきたこのWSですが、入口敦志先生（当館教授）はさらに「自分でやってみる」ことも大切にされています。

今回は、『金々先生栄花夢』のコピーを用いて、黄表紙に仕立てる過程を体験してみることにしました。名付けて「実験国文学」！流行させるために、ないじえる芸術共創ラボのSNSでは「#実験国文学」を多用しておりますよ。

入口先生が分解して構造を観察するために（！）購入されたという『金々先生栄花夢』の複製本をコピーしていただき、上下揃いのキットをご用意くださいました。



まずはそれぞれのパーツを切り抜くところから。何度も和本を作っておられる入口先生は慣れたご様子。松平さんもスムーズなはさみさばきです。

梁さんと和本作りをした時（9月18日WS。袋綴本の詳しい作り方は、この時の日誌をご参照ください）にも思いましたが、手を動かすアーティストの方は、やはり集中力がすごいです。手際よく進めつつ、細かなところにもこだわりを見せておられます。

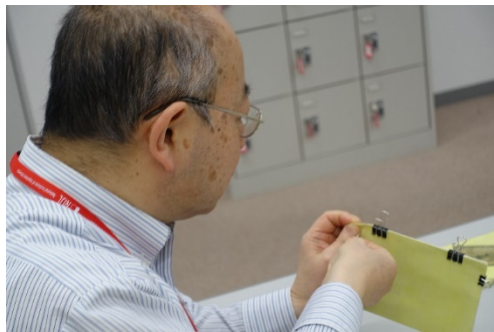
黄表紙はいわゆる袋綴本なので、簡単なお裁縫道具と糊でできてしまいますが、意外とパーツが多いので、不器用な古典インタプリタははやくも悪戦苦闘……このあたりから「二冊はできないな……」と思っています。



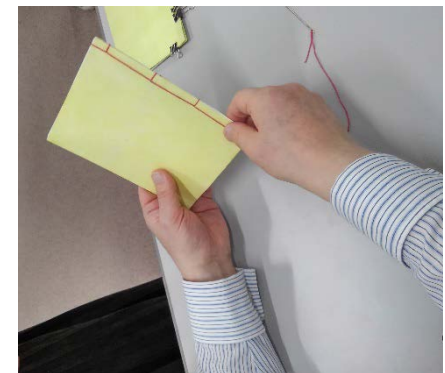
2019年2月5日（火）

まずは入口先生がお手本を示してくださいませ。じっと見守る松平さん。

糸を通す前に4つの穴を開けなくてはならない工程が難しく、江戸時代にどのような道具を使っていたのか分からない、ということは以前も書いたとおりです。ここでは、千枚通しや針を使って穴を開けましたが、この時紙がずれないように、クリップなどでしっかり留めておいた方が良いでしょう、と、入口先生からワンポイントアドバイスをいただきました。



また、袋綴は、一筆書のように針を通すのがポイントです。あまり糸をきつくすると紙を痛めてしまうので、切れやすい糸をほどほどの強さで、というのも和本の特色ですね⁵。



⁵ もっと分厚い本には、こよりで作った中綴じがあるため、糸がきれても中身がばらばらになる心配はありませんが、元の表紙がとれ

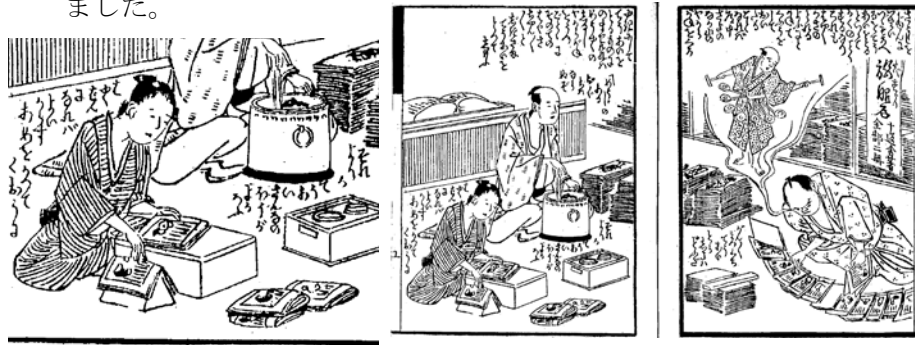
てしまっていることはよくあります。

2019年2月5日(火)

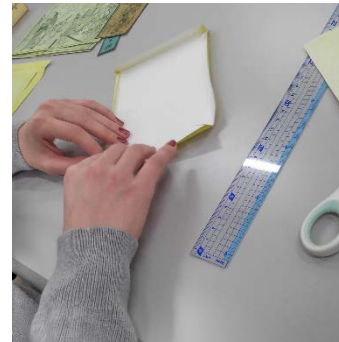
入口先生の説明を聴いた後、いよいよ黄表紙作りに挑戦する松平さんは真剣な面持ちです。

一度パーツをバラバラにしているため、上下にわかれている黄表紙を、間違えずに順番通りに並べるといっても一苦労です。こういった工程があるため、柱(袋綴にした時に山折りになっている部分)に簡単なタイトルと丁数が印刷してあるのですね。松平さんも「体験してわかる難しさ…」とぼつりとつぶやかれました。

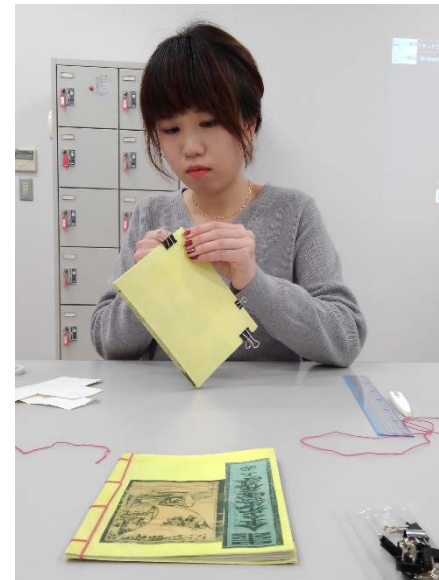
折り目をつける行程では、定規をつかってきっちり作業しておられます。以前、黄表紙作りの行程を探るために参照した『あたりやしたじほんどいや的中地本問屋』(十返舎一九作・画、1802年)では、本屋の小僧さんが「折台」とよばれる三角の台に紙を押し当て、折りやすくしていました。



『的中地本問屋』
黄表紙となる紙を折る。



表紙には裏紙がついている。少し大きめの紙を、他の紙と同じ大きさに折って、裏紙に掛け、題簽と絵題簽を貼る。



意外と難しい穴開け。

2019年2月5日(火)



中程のページから糸を通して縫い始める。



留めた糸が外から見えないように穴に押し込み完成。

「思っていたより難しかったです」とおっしゃるものの、淀みなく作業をすすめ、綺麗な黄表紙を完成させた松平さん。

江戸時代に出版された黄表紙(国文研所蔵)と並べてみました。出来立てのぱりっとした松平さん作本と、たくさんの人の手擦れが残り、大分よれっとした江戸時代本……どちらも愛しい存在です。



左が原本
右が松平さん作

2019年2月5日(火)

3, 実験国文学②—『金々先生栄花夢』を読んでみる—

松平さんが以前おっしゃった「くずし字で黄表紙を読みたい」というご希望に沿い、出来上がった『金々先生栄花夢』と一緒に読んでみました。松平さんは、最近くずし字の読み書きを練習されているとのことで、ご自分でもどんどん読み進めておられました。

江戸時代に出版された『金々先生栄花夢』はくずし字で書かれていて句読点もなく、難しい部分もありますが、3人で頭を寄せ合いながら考えて、読めなかった文字が読めたりわからなかった言葉がわかったりすると嬉しいものです。



黄表紙を原本でじっくり味わう、というのは、私にとっても新鮮な体験でした。自然と、文字と絵の配置や字の書きぶりにも目が向きます。

ひとことで「くずし字」といっても、書かれた時代によって字の形というか、雰囲気は異なります。黄表紙のような印刷物であってもそれは同じで、やはり時代の雰囲気というものが文字から感じられるのです。

私は『金々先生栄花夢』刊行から30年程下った文化期(1804～1818)とよばれる年代の資料をよく扱っているのですが、その頃の草双紙になると、もっと字が詰まっていますし、文字の形も四角い感じがします。それに対して『金々先生栄花夢』の文字はゆったりとやわらかい感じで、作品が出版された天明期の、おおらかで上品な雰囲気が出ているように思えます。

この話題から、雅俗の話⁶がでてきました。雅俗とは、江戸時代の文化を考える時に不可欠な概念で、〈雅〉は正当なもの、古典的なものを指し、〈俗〉は新しいもの、雅をずらして日常に近づけたもの、という意味です。

黄表紙は俗文芸の最たるものですが、『金々先生栄花夢』を観察した時に感じる「おおらかで上品」という雰囲気は、なんとなく雅に近

⁶ 中野三敏『十八世紀の江戸文芸』(岩波書店、2015年)など参

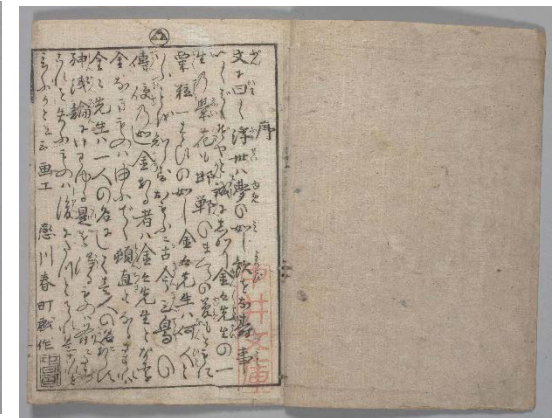
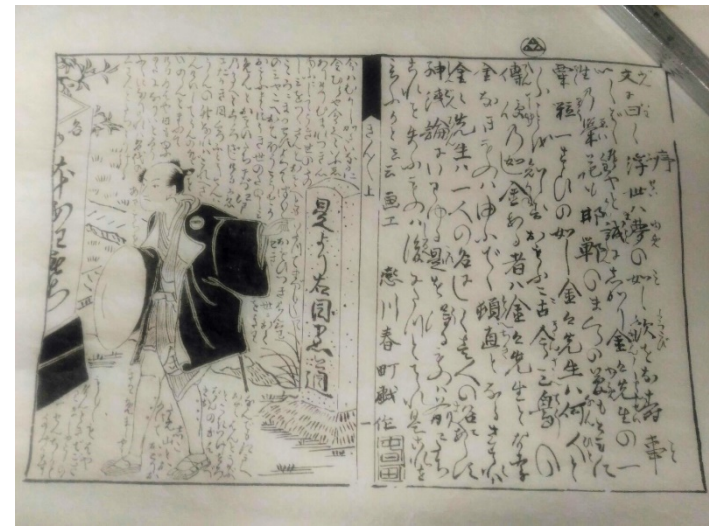
照。

2019年2月5日(火)

いものがありますね、という感想を語り合いました。

4, 実験国文学③—『金々先生栄花夢』を写してみる—

さて、松平さんは帰宅されてから、作った『金々先生栄花夢』をもう一度分解し、全く同じサイズで模写を始められているとのこと。写真をお送りいただいたので、ご紹介致します。



上段：松平さん模写。下段右：1丁表 下段左1丁裏・2丁表
袋綴なので、1丁表と1丁裏が一枚の画面に同居する形になる。

2019年2月5日（火）

写しながら新たな気づきがいくつもあったという松平さん。

たとえば、「描きながら考えていることは、モブキャラでさえも身のこなしが優雅、ということと、こんなに細かいものを描いたり彫ったりしていたら目が悪くなったのではないか？ということす」などと教えていただきました。

また、「本の形をまねることも、模写をすることも、昔の人の手わざや心持ちまでを体得することかもしれないと感じております。そのとおりにはないのですが、学びがたくさんあります」というコメントも寄せていただきました。

同じく AIR の山村さんも、^{くわがたけいさい} 鍛形蕙斎 の『略画式』を何度も模写して、蕙斎の筆運びをご自身のものになさったとうかがっています⁷。「写す」という行為が持つ力や意味についても考えさせられました。

今回の WS を経て、『金々先生栄花夢』と以前とは異なる形で向かい合っておられる松平さん。ご自身の創作へどのように影響があるのか、とても楽しみです。

⁷ 山村さんの活動については、ないじえる芸術共創ラボの HP 「AIR・TIR」についてのページや、古典インタプリタ日誌にてご

紹介しています。